クイーン・シャーロット諸島における民族考古学的研究

――北米北西海岸インディアンの民族誌調査――

菊池　徹夫・熊林　佑允・佐藤　宏之・高橋龍三郎

はじめに

二〇〇三年八月に、菊池、高橋、および熊林が行なった、北米北西海岸の初めての調査旅行については、翌二〇〇四年三月刊行の『史観』一五〇冊に「北米北西海岸部の比較考古・民族学的研究」と題して簡単な報告を行なった（菊池・高橋・熊林　二〇〇四）。

そこでは、バンクーバーからプリンス・ルパート、シトカ、そしてアンカレッジまでを、いわば飛び石伝いに訪れて得た知見について記し、あわせて北米北西海岸インディアンの文化と社会について概観した。そして今回、二〇〇四年夏には、念願のクイーン・シャーロット諸島の調査を行うことができたので、再びこの場を借りてその概略を報告する。

ところで、昨年の報文で菊池は、その報文の表題にもある「比較」および「比較考古学」ということについて簡単に触れ、また研究テーマとしての「社会の複雑化」についても思うところを述べたが、その後、二〇〇四年一二月には、菊池の早稲田大学比較考古学研究所と高橋の同じく先史考古学研究所は、岡内三眞氏の同じくシルクロード研究所と共同で、早稲田大学文学部において「考古学からみた社会の複雑化」のテーマで研究集会を持ち、さらにその成果を基礎に同年三月には同成社から『社会考古学の試み』を刊行している。

今回の調査もまた、そうした関心のもとに行われたが、

もとより短期間の限られた予備的なものに過ぎない。しかし、ともかく、今回は新たに佐藤宏之も加わり、私たちの調査・研究も確実に一歩、歩みを進めたかと考えている。

（菊池徹夫）

Ⅰ　クイーン・シャーロット島の自然と住民

一．自然環境

クイーン・シャーロット諸島は、カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州プリンス・ルパートの北西、約五〇～一三〇㎞の太平洋上に位置し、南北約三〇〇㎞、東西約一〇〇㎞の範囲に大小約一五〇の島々からなる。大きくは北のグラハム島と南のモレスビー島の二島に分かれる。ハイダ族の人々の言語は周辺から孤立しており、それぞれの集落ごとに方言があったといわれているが、今日ではスキッドゲイト方言と、マセット方言が残っているのみである。ちなみに、Haida は the People の意であり、クイーン・シャーロット諸島を示す Haida Gwaii は the Home of the Haida の意である。

経済の中心地は北島南部のクイーン・シャーロット・シティである。現在、島の経済を支えるおもな産業は林業、漁業それに観光業である。現在の人口は全島で約六〇〇〇人を数えるが、うち約一四〇〇人程度がこの島の先住民ハイダ族の人々といわれている。

南島の南半分はグワイ・ハナ国立公園保護区に指定され、固有の植生などの自然遺産と、ハイダ族の遺跡、集落址などの文化遺産が保護され、現在、カナダ政府とハイダのウォッチマンと呼ばれる監視員によって管理されている。

ハイダ族の島、クイーン・シャーロット諸島は、地形的におよそ三パターンに分かれている。北東部の沿岸性低地地帯、西部の台地・丘陵地帯、それに南部の山地地帯である。それらの地形的な相違は海岸線の特徴に最もよく現れており、砂浜、砂利浜、そして岩壁といった特徴的な景観を呈している。南部では無数の入江が陸地に深く切れ込んでいる。

北緯約五二～五四度という比較的高緯度にありながら、暖流の影響で気温が氷点下になることはほとんどなく、一年を通じて気温の変化は少ない。また同じ影響で降雨量が多いことも特徴である。降雨量は東部では年間、約一二〇～一六〇〇㎜に達し、西部山岳海岸地帯ではその三倍以上の降雨量がある。豊富な降雨量と比較的温暖な気候により、森ではコケ類が絨毯のように厚く大地を敷き詰め、トウヒやレッドシダーなどの木々の枝をも覆いつくす温帯雨林が形成されている（D・キューほか　一九九〇）。

二．生業活動

こうした自然環境は、サケ類をはじめとする豊富な魚介類、クジラなどの海生哺乳類を育み、それらはハイダ族の貴重な食糧資源となってきた。食糧資源への依存度からみた場合、魚介類の占める割合がもっとも高く、次いで海生哺乳類、植物質食糧、陸生哺乳類といった順で利用される。これらの食糧資源は、主に冬を過ごすための保存食物とするため、乾燥、燻製などの加工処理がなされた。

魚介類としては、サケ類、オヒョウ、ニシン、タラなどが主である。オヒョウは沖合でタコを餌にして、特徴的なV字形の大形の釣針を用いて捕られた。サケ類は簗や銛を用い海岸低地を中心に捕獲された。モレスビー島の西海岸の人々はスケトウダラから油を採っていたが、その他地域のハイダ族はツィムシャン族との交易でユーラカン（candle fish）オイルを得ていた。

その他の食糧資源として、海生哺乳類ではアザラシ、アシカ、オットセイ、ラッコのほか寄り鯨（座礁したクジラ）など、陸生哺乳類ではシカ、ビーバー、クロクマなどが利用されていた。また、鳥類やその卵、海藻類、ベリー類などのほか、ツガやトウヒの根といった各種植物質食糧も利用された。

春から晩秋にかけての時期が、主な食糧獲得活動の期間に当てられていた。一一月末までにはスモークサーモンなどの保存食糧を冬の村に運び、一二月〜三月頃まで人々はそこに集まって暮らしていた。

交易は、ハイダ族同士の集落間で行われたが、対外的な交易として、トリンギット、ツィムシャン、クワキウトゥル族との間の交易もなされていた。トリンギット族との交易では、カヌー、奴隷、貝類などを提供し、銅、ムースやカリブーの毛皮などを獲得していた。ツィムシャン族との交易では、カヌー、海藻類、乾燥させたオヒョウなどを提供し、ユーラカンオイルや乾燥ユーラカンなどを獲得していた。奴隷はクワキウトゥルとの交易で獲得していた。

（菊池徹夫・熊林允佑）

Ⅱ　クイーン・シャーロット諸島、二〇〇四年の考古・民族誌調査

私たちは、二〇〇四年八月二日から八月九日（現地）の間、きわめて短期間ではあったが、カナダ西海岸クイーン・シャーロット諸島での民族考古学的調査を実施した。今回は、前年度行なったカナダ・北米北西海岸インディアンの文化と社会についての予備的一般調査を承けるかたちで、特に、この島の国立公園保護区内における自然景観と、そ

の中に生きるハイダ族の人々の文化遺産に直接触れることを目的とし、大いに成果をえた。

以下、紙数に制限もあるので、行程と各地における調査の概要を、日誌ふうに簡潔に記すこととする。なお調査にあたっては、南島のモレスビー島では主にゾディアックと呼ばれる一〇人乗りほどの強化ゴム製高速ボートにより、また北島のグラハム島内は車で移動した。

八月二日　成田↓バンクーバー↓サンドスピット
三日～六日　モレスビー島　グアイ・ハナ国立公園保護区
七日～八日　グラハム島↓サンドスピット↓バンクーバー
九日　バンクーバー↓成田

二〇〇四年八月二日

一七時一五分発エア・カナダ〇四便で約九時間、バンクーバー国際空港へ。日本との時差は一六時間である。そこでエア・カナダ国内便に乗り換え、プリンス・ルパート経由で約二時間の飛行、現地時間一五時ごろモレスビー島のサンドスピット空港に到着する。ホテルにチェックイン後、まずはクイーン・シャーロット諸島全島地図を見つけて購入、今後の調査計画の打合せを行なった。

八月三日

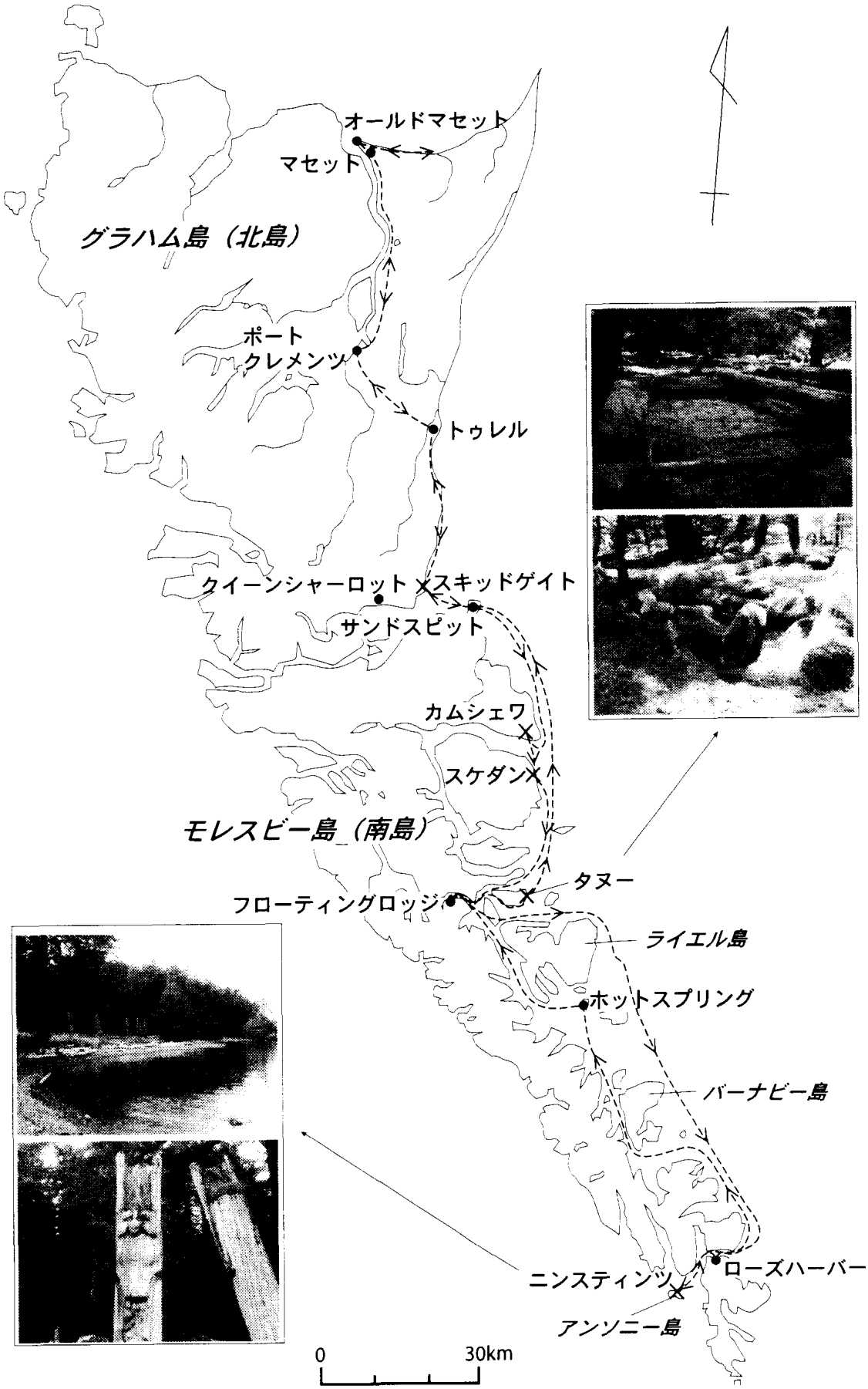
サンドスピットからモレスビーキャンプまで車で一時間

ほど移動、ここでゴム合羽の上下、ライフジャケット、ブーツに身を固めゾディアックに乗り、出航した。古い伐木作業跡が残るニュー・クルー（New Kloo）などに立ち寄る。墓石もカナダ軍の残した機械類も倒木上に置かれた軍靴もそのままますべてが苔に覆われている。その後、カムショワ（Cumshewa）でハイダの集落跡を見る。ここで初めて海に向かって前後二列に建物が並ぶ集落構造を確認。ハウスポールが朽ち倒れている。崩れた建材に絡みつき巻き込むように成長したレッドシダーは、直径一、五～二mほどもあるが、それでも約五〇～六〇年か、という。

カムショワ見学後、スケダン（Skedans）に上陸した。ここでは住居廃棄後、壁材が持ち去られている状況をはじめ、二ビーム（桁）式の古い住居形式、位階の高い人物が住んだ、一五m×一五m、高さ一二mほどもある竪穴式の住居址などを見た。この竪穴の側壁は段状に掘られ、儀礼などで多くの人々が集まるための構造だったようである。ここの mortuary pole（ポール上部に遺体を安置する墓柱）には彫刻がない。

宿舎はフロートキャビン。岸辺から海に張り出させた文字どおりの杭上住居だ。床下は海。もちろんシャワーもなく、トイレの後は海水をバケツで汲んできてそのつど流す。

八月四日



クイーンシャーロット諸島調査行程概略図

ライエル島に立ち寄り、巨大なレッドシダーの森を見学。編み物等に利用するため、部分的に樹皮の剥がされた木もある。

数メートルの荒波に木の葉のように揉まれながらラントリー島へ向かう。途中、ザトウクジラの群れに遭遇。

ラントリー島に上陸、廃棄された集落址を見たが、昨日の集落址と同様、入江と入江で挟まれる地形が好んで選地されているようだ。

その後いよいよ、モレスビー島南端の太平洋側、ハイダ族の村でも最も古く、他と隔絶しており一九八一年に世界遺産に登録されたアンソニー島のニンスティンツ(Ninstints　ハイダ語でスカングワイ)を訪れた。一八二〇年代、毛皮交易の退潮とともに村が衰退したうえ一八六〇年の天然痘の流行で人口は激減し、生き残った者はスキッドゲイトへ移住したのだ。かくて廃棄された住居址、建材等も、いまは一面に苔で包まれ、ハイダ族の繁栄も悲劇もすべてが緑の厚いビロードで覆い隠されている。やがて数十年後には自然に還るだろう。これはハイダ族の自然観でもあり、こうした文化財の保存スタイルもあるのだと改めて実感させられる。数年後、数十年後には、おそらく今回と同じ状態で見ることは不可能であろう。その意味では、我々のこの調査が、遺跡の発掘調査にも似た一回性という性格をもった観察だと思われ、ある種の緊張と深い感銘を覚えながら、彫刻された何本ものモーチャリー・ポールを見て回った。ボートへ戻り、宿泊地ローズ・ハーバーへ。

八月五日

ローズ・ハーバーは、第二次世界大戦までは鯨の解体・加工拠点として日本人もかなり住んでいたところだ。朝、宿舎の裏手の森の中にある、製作途中で放置されたままのカヌーを見に行った。長さ一〇mほどで、伐り倒された場所に横たわったまま、周囲の樹林とともにやはり緑一色に苔で覆いつくされている。だが、近寄ってよく見ると、蒸し広げのために中心線よりやや上で半割されていること、丸太の両端から彫りすすめられて中心部分が彫られずに残されたままとなっていることなどが分かる。一八六〇年の天然痘の流行で途中放棄されたのだという。カヌーは伐木地でそのまま製作し、その後水辺まで運んで蒸し広げ、最終仕上げされるようである。製作にはおよそ二ヶ月かかるという。

その後、ちょうどローズ・ハーバーに滞在中のサイモンフレイザー大学の女子学生アドリアンヌの案内で、すぐ対岸にあるエレン島の砂利浜にあるキルギ・グワイ遺跡を歩き、表採される石器等を見た。直線距離で五kmほどのベンジャミンポイントの玄武岩が用いられている。(この遺跡

については、佐藤宏之がⅢで触れるので参照されたい。）

その後、ホットスプリング（Hot spring）島に上陸。この島のウォッチマンの家でシダーの樹皮の編み物を見た。干した海苔をくれたので、お返しに持参していた江戸前を進呈。食文化の共通性を改めて痛感する。フロートキャビンに泊まる。

八月六日

再びボートで沿岸を飛ばし、タヌー（Tanu）島に上陸。ここにはハイダの民族芸術を世界に紹介したビル・リードの墓碑がある。竪穴式のロングハウスの方形の大きな窪みに長大な桁材（beam）が、やはり苔に覆われて横たわっている。古い二ビーム式がコンタクト以降は六ビーム式になっていく様子が見てとれる。

現在ここのウォッチマンをしている女性が、ニンスティンツで拾ったものを持っているという。早速見せてもらうと明らかに中国の銅銭で、錆と風化がひどいが、何とか「乾隆通宝」と読み取れた。往時の毛皮交易を彷彿させる遺物だ。撮影し、ぜひ大事に保管するように言ってそこを去った。

一八時頃、モレスビーキャンプに到着、午後七時にはサンドスピットに帰着し、実質四日間にわたるモレスビー島での調査を終えた。

八月七日

北島のスキッドゲイトにフェリー二〇分で移動し、ハイダ族の男性がガイドする車でグラハム島を巡検した。

一九八六年のバンクーバー万博の時に製作されたというカヌーを見学したが、長さは約五mで、もとの木の長さは約一四m、幅は二・五mだったという。外側から先に削り、形を整えたのちペグを打ち込んで、内側を彫る際の厚さの基準にしている。一九八七年にバンクーバーから一四人ずつ二チームが四時間交代で二一日間かけ、毎晩ポトラッチをしながら帰航したという。パドルは武器としても使用できるように鋭利なエッジを持っている。彼らに特徴的なベントボックス（曲げ物の箱）は、厚さ一cmほどを残して溝を彫り、七日かけて蒸し曲げで作られるが、今なお、世界中の博物館等にある先祖の遺骨を返還させ埋葬するため、製作が続けられているという。

彼らにとって神聖な場所に建てられ、儀礼の際、約四〇〇人が入るというロングハウスを見た。天井には可動式の煙出しが設けられている。ハイダ族についていろいろ話を聞けたが、ことシャマンに関しては、何度聞いても話したくないと口を閉ざす。

八月八日

スキッドゲイトのハイダ・グアイ博物館を見学し、ハイ

ダ議会議長のグ・ジャウ氏と短時間ながら面会できたので、今回のハイダ世界の旅について、心から謝意を述べた。

サンドスピッド空港を一五時半頃に離陸し、バンクーバーに向かった。

八月九日

一三時半頃、バンクーバー国際空港を離陸。約一〇時間の飛行で成田空港に帰着した。

（菊池徹夫・熊林允佑）

Ⅲ　クイーン・シャーロット島の歴史と文化

一．北西海岸先住民社会の研究

もともと北西海岸先住民社会の文化研究は、H・スペンサー等の古典的社会進化論が標榜したように、人類史的な発展段階を思弁的に追求することにあるのではなく、地理的文化領域（文化圏）を占める文化相互の歴史的関係の解明にあるとしたF・ボアズ等のアメリカ歴史主義人類学の台頭に伴って、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて開始される。

まず、F・ウィスラーは、北西海岸文化圏の設定にあたり、食料資源との関係を重視した。ウィスラーによれば、南東アラスカからオレゴン海岸までの北西海岸文化圏は「サケ文化圏」として定義され、「種子文化圏」であるカリフォルニアとは区別して扱われた。食料資源の構造と文化の相関関係を重視する研究法は、J・スチュワードの文化生態学に引き継がれ、のちに新進化主義人類学を経て、一九七〇年代に本格化するL・ビンフォード等のプロセス考古学において主要な方法に取り入れられた生態学的アプローチに継続されることになる。続いて、A・クローバーは、物質文化の類似性に基づいて北西海岸文化圏を設定したが、その文化領域は、ウィスラーの設定とほぼ同様であった。クローバーは、北米西海岸の先住民社会では、南に向かうほど人口は増加する一方、北に向かうほど社会の複雑度は向上する点を指摘したが、これ以降、農耕～文明社会とは異なり、狩猟採集社会でありながら階層化社会の段階に到達した社会として、北西海岸先住民社会は研究者の注目を集めることになった（Ames 1994; Matson and Coupland 1995; Sassaman 2004）。

二．北西海岸先住民の生業

集約的な狩猟採集活動によって階層化社会に到達した北西海岸先住民の生業の第一の特徴は、海岸・海洋・河川の水産資源の利用にあった（Binford 2001）。それに続いて陸獣・植物資源の利用があり、ホワイト・コンタクト以前

に栽培・飼育されたのは、タバコとイヌだけである。水産資源として、貝類・魚類・海草・海鳥・水鳥・海獣等が集中的に利用されているが、特にカレイ・フサカサゴ等の魚類、六種にのぼるサケ類、海獣・鯨類、イガイや笠貝等の貝類はよく利用された。陸獣は、水産資源に比較して利用頻度が下がる。北西海岸に棲息する陸獣資源は、本土側を中心として、クロクマ・ヒグマ・グリズリー等のクマ類、シカ、エルク、カリブー、ムース等のシカ類、マウンテン・ゴート等の大型獣と各種の小型毛皮獣であるが、クイーン・シャーロット島には、クロクマと小型のカリブーしか棲息していない。現在クイーン・シャーロット島に棲息しているシカは、二〇世紀初頭に白人によって、本土から移入されたものである。カリフォルニア文化圏とは異なり、植物の利用も低調で、各種のベリーやシダの根等が主に利用されていた（Goddard 1924; Drucker 1955; Driver 1969; Suttles 1990; Matson and Coupland 1995）。

三　最古の居住者

クイーン・シャーロット島の歴史は、現在初期完新世から始まると考えられている（Fladmark *et al* 1990）。後期更新世の氷期の北米大陸北部には、ローレンタイド氷床とコルディレラ氷床という二つの大陸氷河が、今日のカナダ全域と合衆国北部を広く覆っており、この両氷床に阻まれたため、人類は新大陸に拡散できなかったとする説が現在も広く受け入れられている。この定説によれば、更新世末の気候温暖化に伴い、西海岸側のコルディレラ氷床と大陸を広範囲に覆っていたローレンタイド氷床の間に細い回廊状の無氷空間が表れ、この無氷回廊を通過した現代人が、一一五〇〇BP頃縮小しつつあった氷床の南側の広大な北アメリカ平原に到達し、最古のパレオ・インディアン文化であるクローヴィス文化を築いたと考えられている（Haynes 2002）。

一方近年、南アメリカ等で、クローヴィス文化期を遡る年代値を示すとされる遺跡の調査例が増加してきたため、これらの遺跡の存在を説明する仮説として、海洋適応植民説が主張されるようになった（Lavallee 2000; Jablonski 2002）。この説によれば、当時通行不能であった大陸氷床を避けて、北米大陸太平洋岸の島嶼部伝いに、海洋資源利用に適応した集団がいち早く南下したとされる。

現在のバンクーバー島やクイーン・シャーロット島付近は、コルディレラ氷床の西端に当たり、氷期には現在海底となっている島嶼周辺も陸化していたと推定されることから、海洋適応植民説の当否を検討する遺跡の調査が活発に行われている。

しかしながら、現在のところクイーン・シャーロット島最古の遺跡は、D・フェジェ等によって報告されたキルギ・グワイ遺跡（九五〇〇～九四〇〇BP）であるため、クローヴィス文化よりは新しい（Fedje *et al* 2001）。最近調査されている太平洋岸島嶼部遺跡の年代も同様な範囲に収まるため、海洋適応植民仮説の具体的立証は、いまだ達成されていない。しかしながら、モレスビー島南端部にあるキルギ・グワイ遺跡は、現在の潮間帯に立地しており、氷床の後退に伴う海水準変動から見て、遺跡が現在の立地条件に近い時期となった初期完新世の所産である蓋然性が高いことから、クイーン・シャーロット諸島では、居住可能となったかなり早い段階から人類の活動痕跡が残されていたと考えられる。

キルギ・グワイ遺跡の石器群は、片面加工の剥片石器が主体であり、削器等を臨機的に使用する活動が主として行われていたと考えられる。しかしながら、少量の尖頭器や銛先らしい若干の骨角器を有しており、狩猟漁労も行われていた。北西海岸最古と推定されている「貝塚」からは、比較的豊富な動物遺存体が検出されている。魚類はロックフィッシュが主体でオヒョウ等の海洋魚も多いが、サケは非常に少ない。陸獣はクロクマのみで、他の哺乳類は全て海獣である。貝の主体はカリフォルニア・イガイである。これらのファウナの組成は、後述するグラハム伝統から民族誌時代に続くそれ（Blackman 1990）とすでによく共通しており、海洋適応が細石刃伝統に先んじて出現していることを示している（Fedje *et al* 2001）。

四、モレスビー伝統

海岸の潮間帯で発見されるキルギ・コンプレックスの時期に続き（Fladmark *et al* 1990）、七五〇〇～五〇〇〇BPになると、モレスビー伝統の細石刃石器群が展開する。南東アラスカの細石刃伝統の系譜を引くと考えられる北海岸細石刃伝統の一部と考えられるが、楔形細石核や両面調整石器は保有せず、アージライト製の稜柱形細石核・細石刃・石刃と、礫器・剥片石器から構成される石器組成を有する。本土側からの黒曜石の供給もない。遺跡立地からは海洋資源の利用が推定されるが、貝塚等が形成されていないため、証拠は未発見である。遺物組成と住居等の遺構がないことから、移動生活を基本とし、季節的に利用された痕跡が遺跡として残されたものと解釈されている。従って、初期完新世のキルギ・コンプレックスとの間には、活動内容に断絶が認められる。ローン・ポイント遺跡、カスタ遺跡、コーホー・クリーク遺跡等が発見されている（Lightfoot 1993; Matson and Coupland 1995）。

クローヴィス文化の石器群は、発達した両面加工のクローヴィス・ポイントと大型石刃からなり（Collins 1999）、旧大陸からアラスカに渉った最初の現代人が保持していたと考えられる細石刃石器群は、クローヴィス文化には組成されていないので、氷床によって南下を阻まれていたアラスカか、無氷回廊を通過する過程で、植刃槍からクローヴィス・ポイントへの大型狩猟具の転換がおこったのであろう。アラスカでは、モレスビー伝統並行期まで細石刃伝統が継続するため、モレスビー伝統は、この細石刃伝統の集団が南下して成立した可能性が高い。

五．グラハム伝統前期

五〇〇〇ＢＰ頃になると、細石刃石器群が消失し、モレスビー伝統からグラハム伝統へと移行する。この移行段階には、Ｋ・フラッドマークによって移行期コンプレックスと名付けられた特徴的な文化複合が出現し、その後モレスビー伝統に連接するとされたが、その後の調査で、この移行期コンプレックスは、二〇〇〇ＢＰまでグラハム伝統と併存することが明らかとなった（Fladmark *et al* 1990）。

五〇〇〇ＢＰ頃に出現したグラハム伝統は、基本的にはホワイト・コンタクトまで継続するきわめて長期間にわたる文化伝統である。クイーン・シャーロット島の対岸である本土側の文化発展と類似するが、より海洋資源に適応した生業を反映して、貝塚・骨角器・磨製技術の出現に特徴付けられる。この伝統を代表するブルー・ジャケット・クリーク遺跡（四三〇〇～二〇〇〇ＢＰ、主体は四〇〇〇～三五〇〇〇ＢＰ）の調査成果に基づいて、生業・技術（物質文化）・居住の特徴を検討する。

ブルー・ジャケット・クリーク遺跡からは、多量の考古学的遺物と人骨を含む動物遺存体が検出されている。石器は、グラハム伝統に特徴的な敲打・研磨調整による剥片製の手斧、敲打器、磨石、スレート製の磨製尖頭器・ナイフ等からなり、細石刃は全く含まれない。骨角器はよく発達し、遺物総量の二五％を占める。片側縁または両側縁に逆刺を付けた銛頭や尖頭器、釣り針の軸、錐、針、パンチ等がある。動物遺存体は、サケ・オヒョウ等の魚類、ラッコ・アザラシ等の海獣、カリブー・イヌ等の陸獣、鳥からなり、数量比は不明だが、海獣骨が上層で多くなることから、時間の経過と共に、本格的な海獣猟が発達した可能性が高い。多様な貝がよく利用され、ムラサキイガイやウニが多く見られる。同遺跡からは、北西海岸最古の墓地（四〇〇〇ＢＰ）が発見されており、オーカー・唇飾り（ラブレット）の使用等に遺体間で差異が認められることから、すでに社会的地位に差があった可能性が指摘されている。人骨の形

質的特徴からも、ハイダ族の祖先集団としても矛盾はないことが示唆されている。

この遺跡には住居跡はないが貝塚は形成しているため、遺跡を残した初期グラハム伝統の集団は、移動生活を基本としながらも、モレスビー伝統の集団よりは長期間、季節的にこの遺跡に滞在して活動したと考えられる。グラハム伝統の集団の生業活動は、季節的な利用にとどまるが、民族誌時代のクイーン・シャーロット諸島の先住民であるハイダ族の海洋資源の利用とよく共通していることは確かであろう。このことは、直ちに集団の系統関係を保証するわけではないが、先史時代以来一貫して、クイーン・シャーロット諸島は、海洋資源利用の場として利用されてきたと考えられる（Matson and Coupland 1995）。

一方、スコッグルントⅡ遺跡やローン・ポイント遺跡等の移行期コンプレックスは、玄武岩製の粗雑な片面調整石器（削器等）と礫製石核石器等からなるため、グラハム伝統の管理的な石器を主体とする組成とは対照的な、臨機的な活動内容を示唆している。フラッドマークは、この両者の違いを本土側文化の受容の差と理解していた（Fladmark *et al* 1990）が、この差異は、やはりビンフォードの言う、同一集団が資源開発の場で発揮する技術システムの二項的差異（管理化論 Curation System）（Binford 1979; Bamforth 1986）と考えるべきであろう。

六、グラハム伝統後期

グラハム伝統後期に関する考古学資料は限られている。クイーン・シャーロット諸島では、五〇〇〇ＢＰ頃まで打製石器の伝統（移行期コンプレックス）が継続し、本土側との一体的な文化発展が認められる。磨製技術・骨角器は引き続き盛行するため、海洋資源利用はより活発化したと考えられている（Matson and Coupland 1995）。Ｐ・サザーランドによれば、中期グラハム伝統の三〇〇〇ＢＰ頃になると、本土側から黒曜石が搬入され利用され始める。この黒曜石の搬入は、本土側との直接的な交流を意味し、そのためにシダー製の大型カヌーが製作され始めたと解釈している（Fladmark *et al* 1990）。

これ以降の時期の調査では、Ｓ・アチソンの組織的調査が興味深い（Matson and Coupland 1995）。アチソンは、クンギット・ハイダ族の居住したモレスビー島南部の海岸域の一般調査を行い、一〇〇箇所を越える多くの居住地遺跡・漁労罠・石器散布地点・墓地遺跡を発見している。六三箇所の開地遺跡は全て海岸にあり、貝塚を伴う。一九の遺跡には住居跡が発見されていることから、定着的な生活活動の比率が上昇したと考えられる。開地遺跡には、五〇

○㎡以下の面積に収まる小型遺跡と一七五〇㎡以上の面積をもつ大型遺跡に二分される。このうち一八の遺跡が調査され、六〇〇～五〇〇BPを中心に、最も古い遺跡で一七二五BPと年代測定された。クイーン・シャーロット諸島のホワイト・コンタクトが一七七四年である（Dazall 1993）ことから、おおむね先民族誌時代の遺跡と評価することができよう。出土した遺物は、グラハム伝統に属するが、特に骨角器はよく発達している。

この調査の成果で注目されるのは、遺跡の空間利用の分析である。民族誌時代の住居周囲の空間利用は決まった使用法があり、特に住居背後の空間は、当該住居の家長ないしその家族に利用が限られていた。発掘でもこの区域からはペンダント等の多量の個人的な遺物が出土したことから、すでに民族誌例と合致する空間利用のパターンの存在が確認されている。

出土した動物遺存体組成も、民族例とよく一致する。貝類はカリフォルニア・イガイがほぼ全てを占め、魚類はサケとロック・フィッシュが主体で、オヒョウは少ない。これは、民族誌の記述では、オヒョウがハイダ族にとって最も重要な魚とされている指摘に反するが、オヒョウは巨大な魚であるため、遺跡外で解体され、身だけが遺跡（集落）に搬入されたからと解釈されている。またサケは、しばしば生活面から脊椎骨が連結した状態で確認されていることから、保存食として利用された証左と考えられている。ハイダ族等の北西海岸先住民社会の異例なほど高い人口密度や発達した社会構造を支えたのは、サケを始めとする豊富な水産資源を主とする保存食料の存在であった（Blackman 1990; Binford 2001）。

引き続き海獣狩猟（アザラシやラッコ等）は活発に行われているが、鯨骨の増加が注目される。遺跡によっては、動物遺存体組成の六五％を占める例があることからも、鯨漁が本格化した可能性が高い。ハイダ族等の北西海岸先住民社会では、鯨漁は、貴族や首長層だけが実施可能な生業行為で、多分に威信獲得行動として位置づけられていたことが知られている（Drucker 1955）。

七．社会階層化の出現

R・マトソンとG・コープランドは、定住集落、複数家族が居住する大型住居、発達した貯蔵経済、階層化社会等によって特徴付けられる「発展期北西海岸パターン Developed Northwest Coast Pattern」が二五〇〇BP頃から認められると考えた（Matson and Coupland 1995）。北西海岸全域の考古学的データからは、こうした特徴の個々は、時期を違えて出現していると考えられるため、それら

を統合した全体的な文化・社会システムの形成時期に関する評価は分かれている（Lightfoot 1993; Moss and Erlandson 1995）。しかしながら、前記したクイーン・シャーロット諸島の考古学的証拠から見ても、一五〇〇BP頃には社会階層化が出現していた可能性は高い（羽生印刷中）。

八．社会階層化の進展

北西海岸先住民社会における社会階層化のプロセスを探求することは、現在の狩猟採集民考古学および人類学の主要なテーマのひとつである（Sassaman 2004等）。その意味で、アチソンの調査成果は興味深い。現在人類学を中心に、北西海岸先住民社会に見られる複雑化社会構造の形成は、世界システムの一環に位置づけられる、世界規模で発達した毛皮交易網に組み込まれた一七～一九世紀（または二〇世紀初頭）の先住民社会の経済的利益の蓄積に起因するとする考えが、盛んに議論されている（池谷　一九九九、岸上　二〇〇一等）。一九世紀に記録された民族誌の記載に登場する、異様な規模で開催されたポトラッチや豊富な物質文化・工芸品の数々、巨大な大型建築物からなる集落や外洋渡航用の大型のカヌー等を見ると、確かに先住民の経済的充実の多くは、ハドソン湾会社・北西会社・露米会社等が仲介した毛皮交易に依っていた可能性は高い（木村二〇〇四、下山　二〇〇五）。しかしながら、その基盤となった生業活動の構造や社会の複雑化は、先史時代を通じて徐々に発展してきたことは明らかである。

すでに初期完新世以来、クイーン・シャーロット諸島を含む北西海岸では、海洋資源に適応した生業システムを展開しており、グラハム伝統前期においては、この生業活動に適応した季節的な居住＝行動を開始している。貝塚を形成し、海洋・河川資源開発のための道具や施設の整備を発展させた。明確な住居跡は発見されていないが、社会構造を反映しやすい墓地遺構からは、集団内格差の存在が示唆されている。さらに、グラハム伝統後期になると、一段と定着的な集落形成を開始し、集落間に格差（大きさ）が認められるようになる。集落内の空間利用形態には、民族誌時代のそれと共通する特徴が観察され、後に威信獲得行動の象徴と見なされている鯨漁も本格的に行われていることから、程度は別として、一定の階層化社会の存在が予兆される。生業活動の内容は、すでにハイダ族のそれとほとんど変わらないと言えよう。

クイーン・シャーロット諸島を含む北西海岸先住民社会において、世界的にも希有な階層化社会を達成しえたのは、先史時代を通じて展開した社会・文化・生業・生活の一体的なシステム的発展を基盤とし、先民族誌時代から民族誌

時代にかけて行われた毛皮交易に代表される先住民交易が、その飛躍を保証したためであると考えられる。

（佐藤宏之）

Ⅳ　ハイダ族の社会組織と儀礼

一．北西海岸の出自とリネージ

北西海岸は一般に母系出自に基づく部族社会である。母系制は特にトリンギット、ハイダ、ツィムシャン、ハイスラ等の北半の諸部族に顕著に見られる。成員権や社会的地位、財産の継承が母親と母親方の系譜を通じてなされる制度である。もちろん南部を中心として父系出自、双系的出自もある。これらの基本的な親族集団が幾つか結合して部族集団を構成する。地域によって、部族が社会的、政治的目的のために多数連合してより大きな部族連合を構成することがある。

基本的な社会単位は自律的な地域集団でリネージから構成される。リネージは出自を母方の系譜を通じて一人の共通先祖に辿る単系出自集団で、固有の名前を冠する。

二．ハイダ族の居住類型と集落組織

ハイダ族の居住類型は季節的な棲み分けを基本としている。簡単な構造の夏の集落と、堅固な冬の集落からなり、家屋はアラスカやブリティシュコロンビア海岸部の住民と同じく、スギのプランクハウスである。家屋は少人数用の小さなものから大きなものだと一〇〇人も収容できるのもある。

冬場の定住集落は、海岸部の凹湾した入江に立地し、海岸線に沿って一列、あるいは二列に並立している。このうち、先導的家屋（leading house）は規模が一回り大きく、多くの人員を収容でき、儀式などを催行出来る仕組みになっている。我々が巡検したスケダン、ニンスティンツ、タヌーなどは例外なく、凹湾した入江に立地した集落跡である。ニンスティンツの集落は二列構成で、入江の湾曲に沿って家屋が巡る。首長の家屋は地下式で内部構造が三段の階段状を呈しており、造りは他の家屋よりも一回り大きかった。

三．半　族

トリンギット族とハイダ族では社会的に大きな二つの区分が存在する。すべての人は生れると共に母親方への帰属に基づいて、どちらか一方の社会区分に属さなくてはならない。これを「半族」と言う。例えば、トリンギット族では半族はワタリガラス族とオオカミ族であり、ハイダ族では、「ワシ族」と「ワタリガラス族」である。この区分原

理は外婚制で、結婚相手は反対の半族から求める。成員は母系原理で決定されるから、ある男とその子供達は自ずと正反対の半族に分属する。ワシ族の男はワタリガラス族の女と結婚するが、その子供達は自動的に母親側の成員、つまりワタリガラス族の成員になるのである。同じ男の姉妹の子供達は同じ原理に従って必然的に彼側の成員になる。すなわちワシ族に帰属し、彼とは最も緊密な親族となるのである。

半族組織は彼らの生活の基準で、様々な社会的意義を有する。ハイダ族では、半族の成員はある「紋章」を使用する権利を分有している。これはかつて半族の伝説上の動物、あるいは超自然的存在とか、先祖そのものの表象であるといわれる。理論的に反対の半族は同じ紋章をもつことはないし、同じ個人名、家名、カヌー名ももつことはない。しかし、男は反対側の半族の人々によって通過儀礼を受け秘密結社に入る。彼が死んだときには、反対の半族が葬式を執り行う。家屋墓では、ワタリガラス族はワタリガラス族と同じところに遺体を置くし、ワシ族はワシ族と同じにする。ワタリガラス族とワシ族は一緒に埋葬されることはないから、夫と妻は一緒に埋葬されることはない。夫と妻の間は分裂が深く、妻側と夫側が戦争になったときには妻はしばしば夫を裏切って、自分側の人たちに夫を引き渡すといわれている（Swanton 1902）。

四．家長と妻、子供の立場

家屋は一人の男によって所有されている。これをイリサギダス（I'lixagidas）、すなわち「家の首長」（house chief）という。彼の妻は家そのものには何の権利も有していない。母系出自なので、妻は嫁ぎ先ではほとんどよそ者である。両半族間に敵意が芽生えたときには彼女の地位は微妙になる。彼女の子供たちも、一緒に住む人々に対しては何も要求することができない。人々は彼らをよそ者として捉えているからである。困ったときには何の支援を得ることができず、大抵の場合は自然と自分の母の村に帰る。この傾向が一層加速されるのは、少年が若いうちに親元を離れ、母方の叔父（少年と同じ半族）と暮らす習慣があることである。少年はいつまでも母親と一緒に暮らすとだめになると信じられ、叔父方に出すことが奨励される。もし少年が母親の家を継承する者だとみなされる場合にはとくによく起こる。彼は叔父からすべての教育を受けて、その場所を継承する準備をし、叔父の片腕として活躍し、叔父の代弁者として機能するのである。彼が家を継いだときに、もし叔父が死ねば、残された未亡人と結婚することが慣例になっている（Swanton 1902）。

五．ハイダ族のリネージ

ワタリガラス族とワシ族は共に内部に多くのリネージを包括している。一九〇〇年代初頭にはワタリガラス族のリネージは二二、ワシ族が二三のリネージから構成されたという（Blackman 1990）。これらのリネージはサイズの拡大にあわせて内部での紛争などによって分節化を遂げ、時間の経過と共に数が変動する。

北西海岸の北半地域ではリネージ集団は母系出自で、母親方と関係した男を中心に構成される。リネージ集団は、兄弟と母方のイトコ、彼らの姉妹の息子達、第二世代の姉妹の息子達から構成される。姉妹達自身もそのリネージ集団の成員であるが、彼女らは他のリネージの男と結婚して遠方で生活しているので、リネージの機能をわずかしか果たせない。リネージの成員の妻達は、他のリネージに属するので、夫のリネージのことについては、殆ど関与しない。もちろん、これらの子供達は母親方のリネージに属する。

リネージは政治的に独立している。他のリネージと同盟関係を構築するが、保有する重要な経済的所有物、例えば魚釣り場、狩猟場、野イチゴを摘む場所などはリネージが保有する。複数の家と首長を擁し、儀式においても独立性が高い。帰属するクランや半族の紋章を有すると同時に、リネージ自身の紋章を保有する。リネージには多数の儀式に関する特権が付与される。

ハイダ族のリネージ村（lineage-village）は大きさが多様である。歴史時代に人口が減少するにつれ、崩壊したリネージに生き残った人々が村を捨て、人々が集住するセンターに集ったために、旧態は不明瞭になった。しかし、初期の文献によると、四、五〇人からなる一、二軒の家屋の村もあるが、数百人からなる村々があったという。この数値は大雑把な推定に過ぎないが、ドラッカーは一軒あたり平均三〇～四〇人くらいの人口を見積もり、平均一軒あたり四人～八人の親族成人男性と、同じ数の母方の甥達（姉妹の息子達）、未亡人になった姉妹、母方の叔母たちから構成されたと推定した（Drucker 1963）。同居人はリネージの成人男性の妻とその子供達、および奴隷達であるが、彼らはそのリネージの成員ではない。

六．社会階層

社会階層とその条件に関して言うと、北西海岸では、その北半地域で世襲的位階と首長制のシステムが見られるのに対して、南部では富財の所有が社会的な条件となっている。ハイダ族の高位階の人々は、両親が子供のためにポトラッチを開いて、一つ以上のポトラッチ名を付ける。子供のうちに、刺青をさしステータス表徴を身にまとうのであ

る。貴族はリネージやサブリネージの首長の座や高い名前を継承する。低位階の人達は、自身のためにポトラッチを開くことが出来ない。彼らは自身の家を持てないし、高いランキングの名前を継承することもない。彼らは位階のシンボルを開示することもないし、ポトラッチや祭宴を催行することもない。奴隷は戦争で捕虜にしたもの、及びその子供である。彼らは所属品だと考えられたし、身分は世襲された。

ハイダ族の位階は個々の村において、基本的に以下の四ないし五つの階層に分轄される。

①集落の首長は、集落を所有するリネージ中、最高位のランクを占める人物である。彼はまた共同体の中で最も裕福な男である。彼は多くの祭宴を催すこと、貧者、孤児、老人を支援する事が期待されている。また個々のリネージには首長がいる。同様に一軒の世帯には一人の首長がいる。種々の首長の血縁者はある種の上位階層（貴族）を作り上げる。

②価値のある技術をもつ集団の成員は、例えばトーテムポールの彫刻者やクジラ捕獲者などは特別の階層を構成する。

③他の集落住人は「普通人」階層に属する。

④シャーマンは医者である。住民が病気になった時には、彼はシャーマンに早変わりし、儀礼と薬、特別のパワーで病人を治療する。

⑤奴隷は同じ部族からは調達しないで、異部族を襲撃し、そこから奴隷として調達する。家族のステータスは奴隷の数によっても決るので、首長や家族の威信と関わる。奴隷は他の奴隷とのみ結婚を許される。奴隷の子供は終身、奴隷となる。奴隷は交易されるし、売り買いの対象になる。時には、奴隷は主人の裕福さを人々に知らしめるために。儀式などの機会に殺されることすらある。

ハイダ族が認識するのは位階の序列に加えてクラスシステムである。ハイダ族社会内部のランキングは、祭宴やポトラッチなどで、招待客が座る席順によって知ることが出来る。

あるインフォーマントによれば個人的な位階に加えて、リネージ間に格差があり、ワタリガラス族の三リネージとワシ族の三リネージは他のリネージより高い位階をもっているという。マセット・ハイダ族ではリネージに位階があり、一つのリネージは土地を僅かにしか所有しないという理由で、他のどれよりも下に位置付けられる（Blackman 1990）。

七．首長

ハイダ族の村には個々の首長がおり、彼はその地位をリ

ネージあるいは家の最高位階にあるという理由で保持している。単一のリネージからなる村では、リネージの首長が村の最高権威である。多数のリネージから構成される集落では、村の首長は（同時に彼自身の家の首長でもある）特別な称号をもっている。「村の主人」、「村の所有者」、「村の母」という称号である（Drucker 1963）。

リネージの首長は、リネージの財産の管理人としての側面がある。もし他のリネージの成員が、リネージの資源地や財源に近接しようとすれば、まず首長の許諾が必要になる。首長はリネージに関する事柄について相談を受けるし、リネージの成員を集合し戦争を宣言したり、逆に止めたりする。家屋の所有者は「家屋の首長」で、彼の権威は家屋に居住するすべての構成員に行き渡る。彼は世帯のメンバーが何時冬の村を離れて漁労キャンプに向かうかについて決断をする。彼はまた姉妹の息子に戦争に参加するように招集する。

首長の座は母系原理の世襲原則にしたがってリネージで継承されて行く。通常、称号は次の最高齢の兄弟に、次いで若い兄弟に、そして最高齢の姉妹の年上の息子の順位で継承される。富の獲得に成功したかどうかは首長の基準として重要である。そしてウダツの上がらない姉妹の息子はとばされて、離れてはいるがもっと生産的で成功しそうな甥に回されることもある。民衆の圧力がその実践に際して影響を及ぼすことがあるが、まれに首長の座は他のサブリネージ、ないしは半族の他リネージの個人に引き渡される事がある。希だが、首長の座は反対側の半族の個人に手渡されることがある。称号が父からその息子に引き継がれる場合である（Blackman 1990）。

どの地位に関する継承者の選択においても、必要条件は富を蓄えていることである。若い弟が年かさの兄を追い越してその地位についてしまうことや、より縁遠い人が近親のものを追い越してしまうことが起こる（Swanton 1902）。

首長の権力は多様である。彼の財産によるところが大きい。先に述べたように低位リネージの成員は例外として、誰もがリネージの首長になることはできる。もし彼のリネージが村を所有していたならば村の首長になることもできる。首長の権力は彼自身の能力によっている。ある首長は絶対的な専制君主だといわれるし、暴君だといわれる一方で、ほかの首長は影響力を失い、見捨てられたりしないまでも首長とは認められなくなったり尊敬されなくなったりするという（Swanton 1902）。

ハイダ族の社会組織は戦争集団による序列からも成り立っている。個々の家は一艘のカヌーを持っており、家の首長、またはその代理人が戦争首長と呼ばれる。しかし、カヌー

で行動中の行為はもう一人の男に委ねられる。彼はシクラディア（Sik la'dia）と呼ばれる。彼は常に経験豊かな優れた戦士で、真の戦争首長である。

八．儀式

ハイダ族の儀式は直接的に社会の位階構造と関連する。大きな儀式、祭宴、ポトラッチや舞踏会は高位階の人々が開催する。それらを催行するのは彼らの責務で、人々の目に威信を保つために、首長はしばしば祭宴を開催する。首長のタイトルを継承する時に、また子供達に高い貴族の地位を与える時、家を建てる時に、彼らはその都度ポトラッチをするように定められている。

財産は儀式においてホスト側から客側に分与される。ブラックマンによると、最も大きく、最も手の込んだ富の分配は、ワ・タ・ル（*ɦwa・ta・l*）と呼ばれ、家屋とトーテムポールが完成した時のポトラッチである。ワ・タ・ルでは、家屋の新しい所有者が家の首長の地位に就いたことを記念して数回富が分配される。家屋の所有者の子供達の利益に対して行われるポトラッチでは、高位のステータスに見合うようポトラッチ名と刺青をもらう。子供の立場を確たるものにするために、ワ・タ・ルが行われ、この時には子供の紋章を刻んだトーテムポールが立てられるという

(Blackman 1990)。

葬送のポトラッチは高位の個人の死を印し、後継者が死者の地位を継承することを記念する。

女子の思春期を印すために、小さな財産の分配を伴うポトラッチが行われる。思春期のポトラッチや葬送のポトラッチ、そしてワ・タ・ルのポトラッチでは分配される富の第一の受け手は父のリネージの成員である。

ポトラッチは祭宴を伴うのが一般的であるが、祭宴を催行するホストは別々である。祭宴を催すのは子供の最初の名前付けの折り、結婚、死、高位の来客をもてなす時、あるいは個人の威信を高める時などである。ポトラッチと同様に、祭宴は細かなエチケットに支配されている。来客はそれぞれの位階に応じて席が決められている。ある食物が供され、特別に彫られ彩色された祭祀用の皿、スプーンが使用される。

九．守護霊に関する儀礼

子供は一二、三歳になったら「守護霊」を求めるように期待される。それは動物の形をとっている。一旦、彼が見出した守護霊は、人生を通じて彼を守護する。守護霊は魂の中に入り込み、実践的なことや儀式などについて様々なことを教える。漁民の守護霊は銛の使い方や特別な歌や舞

踏について教える。

守護霊は出来るだけ早く見出すことが期待されるが、男児は特別な儀礼を通じて見出す。冬場の寒い時期に、雪の積もった河で禊ぎをする。彼は村を離れて一人森の中に入る。しばしそこに滞在し、周辺を歩き回り、霊がやってくるのを待つ。将来カヌー造りになるのであれば、キツツキを守護霊とする。漁師はサケ、またはニシンを守護霊とする。戦士はスズメバチを守護霊とする。猟師はオオカミを守護霊とする。一生にわたる関係である。成長して大人になると守護霊は彼の中に住み着き、さらなる技術や勇気の様な性格を授けるといわれる。

一〇．死と葬送儀礼

ライフサイクルの中で、死は最も儀式と関連する。儀礼の立派さは死者のランクによる。死に際して、体が洗われ、衣装を着せられ顔はペイントで塗られるが、それらの仕事は死者の父親のリネージの女性達が行う。遺体は個人のゆかりの品々に囲まれ、家の後に、数日間置かれる。父親のリネージに属する男が棺桶を作る。棺桶の遺体は側壁に空けられた穴を通じて家から出され、主家屋の後ろにあるリネージの家屋墓（grave house）に安置される。そこで遺体は新しく彫刻された柱のニッチェに移されるまで静かに置かれるが、もし記念柱がたっているのであれば、遺体は移されることなく家墓にずっとおかれる。葬送ポトラッチは、墓ないしは記念柱がその場所に築かれたときに行われる。その男に対する葬送ポトラッチは彼の後継者によってなされる。女性の葬送ポトラッチは彼女の夫によって催される。一般人は、高位階の家屋墓には埋葬されない。また彼を称えるために彫刻された柱は立てられることはない。奴隷は死とともに海に捨てられる。

死とともに彼の遺産は若い弟と甥に引き継がれる。死者の家屋は文字通り彼の後継者によって掃除され、未亡人には調理用の什器と個人的な財産が残されるだけである。女性の財産は死とともに彼女の娘に引き継がれる。弔いの印として未亡人は数日間断食を行う。

（高橋龍三郎）

まとめ

今回の調査旅行の概報とともに、クイーン・シャーロット諸島のハイダ族の文化と社会について述べた。今回の調査で最も印象的だったことの一つに、彼らの、自分たちの祖先の文化遺産に対する態度がある。それは、とにかく自然のままに残して置き、朽ちるに任せて自然に還すといったものである。したがって、私たちが今回見た遺跡を、今

後同じ状態で再び見ることは、おそらくないであろう。そうした方式じたいの是非を含め、やはり湿潤な環境で、同じように木材を中心に種々の植物性の建材や道具類を多用するという日本の文化伝統と比較して、大いに考えさせられ、学ぶところが多かった。

そんなわけで、一回性の調査の厳しさといったものをつねに意識しつつ、従来、縄文文化とのアナロジカルな比較対象として紹介されてきた北西海岸インディアンの文化について、その一端とはいえ、実際に具体的な資料に接することができたことは、今回のフィールド・ワークの何よりの成果であった。

私たちは、今後もできるかぎり、この地域の諸文化と社会、歴史について、比較考古・民族学的調査を試み、当面は、人類社会の複雑化といった課題の解明に努めたいと思っている。また、中・長期的には、比較の範囲をさらに拡大し、目標としては、環太平洋諸地域の先史・古代、そして前近代社会の歴史までをトータルに考えて見たいと願っている。すなわち、日本列島から北へアジア極東、サハリン、千島列島、カムチャッカ半島、アリューシャン列島、そして北米大陸、いっぽう南へは東南アジア、オセアニア、そして中南米大陸という、太平洋を中にする大きな鎖の環において、人間の営みの歴史を追ってみようという、やや無謀に近い望みである。

私たちは、日本列島の全域はもちろん、これら北と南の諸地域のいくつかについても、諸先学のおかげで、すでにかなりの調査・研究成果をもちえている。今回のカナダ北西海岸での初歩的な調査も、太平洋を取り囲む、この大きなリンクの空白を埋めるための壮大な作業の出発点になれば幸いこの上もない。

我々にとって初めての、ほぼ秘境ともいうべき土地での調査を無事に終え、成果をあげえたのは、全行程を共にしてくれた田子祐二氏のお陰である。明記して感謝したい。

なお、この調査・研究は、菊池は早稲田大学比較考古学研究所の、高橋は同じく先史考古学研究所の活動の一環として行なった。また、この調査の遂行にあたって、菊池は、主に文部科学省科学研究助成費（基盤研究(B)(2)研究代表者　菊池徹夫）に拠った。佐藤は、(財)鹿島学術振興財団の助成研究「持続的資源利用の民俗知による保全型狩猟の構築」（研究代表者　佐藤宏之）に拠った。また高橋は、早稲田大学特定課題研究助成費（代表者　高橋龍三郎）、鹿島学術振興財団研究助成費（代表者　高橋龍三郎）に拠っている。本稿は、当然それらによる成果の一部である。記して感謝する。

（菊池徹夫）

参考文献

Ames, K. M. 1994 The Northwest Coast: complex hunter-gatherers, ecology, and social evolution. *Annual Review of Anthropology*, 23: 209-229.

Bamforth, D. B. 1986 Technological efficiency and tool curation. *American Antiquity*, 51: 38-50.

Binford, L. R. 1979 Organization and formation processes: looking at curation technology. *Journal of Anthropological Research*, 35: 255-273.

Binford, L. R. 2001 *Constructing Frames of Reference: An Analytical Method for Archaeological Theory Building Using Ethnographic and Environmental Data Sets.* University of California Press: Berkeley.

Blackman, M. B. 1990 Haida: traditional culture. In *Northwest Coast*, edited by W. Suttles, pp.240-260.

Collins, M. B. 1999 *Clovis Blade Technology*. University of Texas Press: Austin.

Dalzell, K. E. 1993(1968) *The Queen Charlotte Islands, vol. 1: 1774-1966.* Harbour Publishing: B. C.

Driver, H. E. 1969 *Indians of North America.* 2nd ed., University of Chicago Press: Chicago.

Drucker, P. 1963 *Indians of the Northwest Coast.* McGraw-Hill Book Co.: New York.

Fedje, D. W., R. J. Wigen, Q. Mackie, C. R. Lake and I. D. Sumpter 2001 Preliminary results from investigations at Kilgii Gwaay: an early Holocene archaeological site on Ellen Island, Haida Gwaii, British Columbia. *Canadian Journal of Archaeology*, 25: 98-120.

Fladmark, K. R., K. M. Ames and P. D. Sutherland 1990 Prehistory of the Northern Coast of British Columbia. In *Northwest Coast*, edited by W. Suttles, pp.229-239.

Goddard, P. E. 1924 *Indians of the Northwest Coast.* American Museum of Natural History: New York.

Haynes, G. 2002 *The Early Settlement of North America: Clovis Era.* Cambridge University Press: Cambridge.

Jablonski, N. G. (ed.) 2002 *The First Americans: The Pleistocene Colonization of the New World.* California Academy of Science: San Francisco.

Lavallee, D. 2000 *The First South Americans: The Peopling of a Continent from the Earliest Evidence to High Culture.* The University of Utah Press: Salt Lake City.

Lightfoot, K. G. 1993 Long-term developments in complex hunter-gatherer societies: recent perspectives from the Pacific Coast of North America. *Journal of Archaeological Research*, 1(3): 167-201.

Matson, R. G. and G. Coupland 1995 *The Prehistory of the Northwest Coast.* Academic Press: New York.

Moss, M. L. and J. M. Erlandson 1995 Reflections on North American Pacific Coast prehistory. *Journal of World Prehistory*, 9(1): 1-45.

Sassaman, K. E. 2004 Complex hunter-gatherers in evolution and history: a North American perspective. *Journal of Archaeological Research*, 12(3): 227-280.

Suttles, W. (ed.) 1990 *Northwest Coast*. Handbook of North American Indians, vol. 7, Smithsonian Institute: Washington, D. C.

Swanton, J. R. 1902 *Social Organization of the Haida, Proceeding of the International Congress of Americanist*, 13th Session, New York.

池谷和信　一九九九年　「狩猟民と毛皮交易―世界経済システムの周辺からの視点―」『民族学研究』六四巻二号、一九九―二二二頁

菊池徹夫、高橋龍三郎、熊林允佑二〇〇四年「北米北西海岸における民族考古学的研究」『史観』第一五〇冊

岸上伸啓二〇〇一年　「北米北方地域における先住民による諸資源の交易について―毛皮交易とその諸影響を中心に―」『国立民族学博物館研究報告』二五巻三号、二九三―三五四頁

木村和男　二〇〇四年　『毛皮交易が創る世界―ハドソン湾からユーラシアへ―』岩波書店

D・キュー、P・E・ゴッダード（菊池徹夫・益子待也訳）一九九〇『北西海岸インディアンの美術と文化』六興出版（世界の民族誌）

下山晃　二〇〇五年　『毛皮と皮革の文明史―世界フロンティアと掠奪のシステム―』ミネルヴァ書房

羽生淳子　印刷中　「北米北西海岸とカリフォルニアの狩猟採集民」佐藤宏之編『食糧獲得社会の考古学』朝倉書店